

# 沖縄の洞窟信仰と観光

——民俗知活用の可能性を探る——

塩 月 亮 子

## はじめに

現在、世界中で市場経済化や情報化、交通技術の発達など近代化が進むなか、聖地と観光、あるいは信仰と地域振興との関係は、より密接になってきている。たとえばトルコの Cappadocia やスリランカのキャンディ、インド・ブッダガヤのマハーボーディ寺院、中国・敦煌の莫高窟などの伝統的な聖地は、近年、UNESCO の世界遺産として認定・登録されるようになった。このような動きは、聖地の観光化にますます拍車をかけている。日本でも、最近、聖地の観光化が進んだり、伝統的な巡礼路を模した新たな巡拝路が提案されたりしている<sup>①</sup>。だが、以前から信仰心を抱いて聖地を参拝してきた人々にとり、このような動きは必ずしも喜ばしいこととは限らない。なぜなら、歴史をよく知らず信仰心も持たずに興味本位でそこを訪れる観光客が増えたり、それまでは無かった参拝料（あるいは見学科や入館料）を新たに課せられるなどの問題が生じたりするからである。

そこで、本稿では、信仰と観光とのはざままで揺れる聖地のひとつとして、沖縄における洞窟（ガマ）を取り上げ、その新たな活用の試みと、その結果生じたコンフリクト（軋轢・葛藤）や問題点などについて論じていく。具体的には、まず、歴史や文化、自然環境など複合的な体験学習の場として、聖地である洞窟へのツアーが開催されている事例を紹介し、洞窟の観光資源化の様相

についてみていく。次に、伝統的な聖地とされる洞窟に泡盛を貯蔵し、古酒にして観光客などに販売している事例を取り上げ、地場産業の育成および地域活性化と、従来の信仰との間にみられる埋めがたい溝を明らかにする。続いて、世界遺産に認定された琉球王国時代の聖地、セーファーウタキ（斎場御嶽）の現状を紹介し、観光化によって生じた新たな問題点を提示する。

さらに、これらの事例を通じ、聖地の観光化が地元には及ぼす影響のみならず、観光化に対する地元の人々の伝統観念を用いた置換や再解釈という対処の知恵、いわゆる民俗知についても明らかにする。それにより、聖地の観光化には単なる収奪の要素ばかりではなく、地元の人々もその動向に柔軟に対応し、新たな文化を創造しようとしている側面もあることを示す。

## 1 洞窟の観光資源化

洞窟を観光資源として活用する動きは、近年、世界の至る所でみられる。それは、単なるスポーツや学術調査としての洞窟探検だけではなく、もっと気軽に装備の必要のない洞窟を観光地として訪れ、楽しむというものである。たとえば、南イタリアのマテーラでは、かつては貧しさの象徴であった洞窟住居が1993（平成5）年に世界遺産に登録されたことにより、そこを訪れたり、あるいは住居を借用・購入したりする観光客があらわれた。また、変化の少ない涼しい気温を利用して、洞窟をキノコやワインなどの栽培・貯蔵庫にし、食を中心とした観光地を創出する動きも、フランスをはじめ世界各地でみられる<sup>(2)</sup>。

沖縄には、ガマとよばれる鍾乳洞の洞窟が数多くある<sup>(3)</sup>。これらは古くは人間の居住地や墓として利用され、そのいくつかは、神の居場所として人々の信仰対象となってきた。また、第二次世界大戦の沖縄地上戦の折、洞窟の多くは避難壕として使用された。ここでは、これら沖縄にある洞窟が観光資源として活用されている例のひとつとして、「ガンガラーの谷」を取り上げ、その特徴

を述べていきたい。

1967（昭和42）年3月、愛媛大学学術探検部により、沖縄南部で洞窟が発見された。そこは玉泉洞と命名され、非常に大きく美しい鍾乳洞として、現在も沖縄の観光名所のひとつとなっている<sup>(4)</sup>。ここで扱う「ガンガラーの谷」は、この玉泉洞のすぐ近くにある鍾乳洞が崩壊してできた谷間を指す（所在は沖縄県南城市玉城字前川202番地）。2008（平成20）年8月より、この谷やその周辺の洞窟を活用し、地元の歴史や文化、自然環境などを学習する約1時間20分間のガイド付きツアーが民間企業（株式会社南都）により実施されている<sup>(5)</sup>。

次に、筆者も体験したツアー内容を紹介する。洞窟への階段を降りたところは、鍾乳石がいくつも垂れ下がった広い空間となっている。ここはCAVE CAFE（ケイブ カフェ）と名付けられ、写真展やコンサート会場などに活用されている（写真1）。その空間の奥には自然にできた開口部があり、そこを



写真1 CAVE CAFE

出たところがツアーの出発点となる。CAVE CAFEを出、ツアー一行（20名程）は右手に見える川に沿って進む。植生の説明を聞きながら歩くと、左手に「イ

ナグ（女）洞」といわれる洞窟があらわれる（ツアーでは内部に入らない）。その前には「母神」と書かれた札が立ち、乳房の形をした2本の鍾乳石の写真などが展示されている。さらに進むと、別の大きな洞窟に至る。ここは「イキガ（男）洞」とよばれ、洞窟の中には男根の形をした巨大な鍾乳石がある（写真2）。この洞窟は「サニヌシーウタキ（種之子御嶽）」あるいは「種之神（サネシン）」として、先ほどの「イナグ洞」とともに子授け信仰の対象とされて



写真2 イキガ洞

きた。ただし、この谷近くに住む人々は、そこを「カーリーな（嘉利な；縁起の良い）洞窟」とみなしてはいたが、聖地として祀ってはおらず、もっぱら外部のユタ（民間巫者）などに信仰されてきた場所ということである<sup>(6)</sup>。さらにトンネルをぬけて奥に進むと、ガジュマルの大木をはじめ、手つかずの自然が残された谷に至る。そこはかつて洞窟だったが、天井が崩落して今は谷になって

おり、地元の人々は、上から石を落とすと「ガンガラー」という音がしたことから、その一帯を「ガンガラーの谷」とよんだという。このツアーでは最後に「武芸洞」とよばれる洞窟に行き、旧石器時代人の住居跡と目される発掘現場を見学する（写真3）。

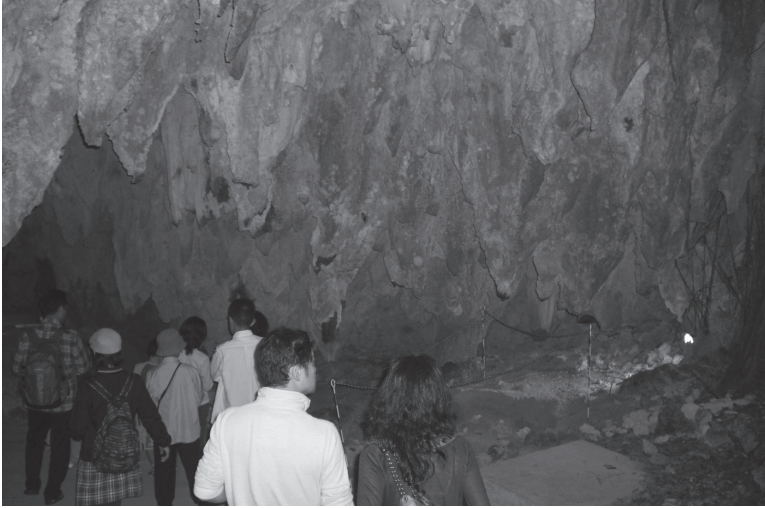


写真3 武芸洞

続いて、株式会社南都「ガンガラーの谷」担当課長、T・K氏へのインタビューをもとに、ツアーのより詳しい内容を見ていく<sup>(7)</sup>。

#### (1) 株式会社南都「ガンガラーの谷」担当課長、T・K氏の話

株式会社南都の前身である玉泉洞観光株式会社は沖縄の人が作った地元企業であり<sup>(8)</sup>、1971（昭和46）年、本島南部の観光地として玉泉洞をオープンさせた。その際、近くにあった「ガンガラーの谷」もみせる価値が十分あると考え、一緒に公開しようとした。だが、上流の畜舎から流れ出る汚物により川が汚染されており、臭いもきつくてとても公開できないということになった。けれども、最近になり、浄化槽などに関する法律も整備されるなどして川がきれいになっ

てきたので、2008（平成20）年8月から公開することとなった。ガジュマルの大木のところなどは道路下のゴミ捨て場となっていたため、オープン直前にはダンプカー130台分のゴミを捨てて掃除をしなければならなかった。公開にあたっては、地元の人々に来てもらいたいという意図からチラシを配ったりしたが、本土向けの広告は特にやらなかったし、今でもあまりやっていない。この公開にあたり、地元の人々の反対はなかった。「ガンガラーの谷」に残る素晴らしい自然をたくさんの人に見てもらい、そこを壊さずに守っていこうとする姿勢を培うのがツアーの目的。だから、ツアー時にも、以前は川が汚染されていたことを包み隠さずツアー客に説明している。現在は、地元の小学校などで総合学習の時間として「ガンガラーの谷」を見学したりする。また、修学旅行でも何校かここに見学に来た。このあたりは自然の景観が珍しいだけではなく、何千年も前から古代人が住んでいた場所でもある。大きな風葬墓もある。このように、「ガンガラーの谷」には、多岐的・複合的な側面がある。それらを正しく伝えたい。

玉泉洞も「ガンガラーの谷」も、ともに株式会社南都が運営しているが、玉泉洞のある「沖縄ワールド」と、ここ「ガンガラーの谷」とは施設もスタッフも別となっている<sup>9)</sup>。「ガンガラーの谷」のスタッフは今6人いて、ツアー客のガイドだけでなく、ツアーの予約、コース沿いの草刈り、カフェの仕事などもローテーションでおこなっている。スタッフには沖縄の人もそれ以外の人もいるが、みな沖縄を好きで、ここをよくしたい気持ちがある。

ツアー客は年々増えており、将来は人数制限をしなくてはならないかもしれない。向いの「沖縄ワールド」には年100万人以上の観光客が訪れ、その内訳は旅行会社の団体ツアー客が多い。それに対し、「ガンガラーの谷」には、現在、月に3千人ほどの観光客が訪れる。その8～9割は個人客で、多くはネット、あるいは口コミで知ったという。参加者の年齢も0歳から90歳までと幅が広く、個人参加以外にも家族参加、友人同士、老人のグループなど、老若男女が訪れ

る。2009（平成21）年2月までは地元（沖縄県人）の客が多かったが、3月以降は沖縄県外からの客の割合の方が多くなった。海外からの観光客も少しだが来てはいる。今、ガイドツアーは日本語のみだが、英語・韓国語・中国語の資料も作ろうかと言っている。「ガンガラーの谷」は最初個人客をターゲットとしたが、今は地元の老人クラブや旅行会社の団体客も少しずつ受け入れ始めている。ひとつのツアー客数はマックス20人とし、谷の中に人を入れすぎないように注意している。これは自然を守るためでもあり、ツアー中は次のツアー客とぶつからないよう、間隔を開けている。

CAVE CAFE はアプローチしやすい入口、ツアー前の待合ゾーンとして作り、単体としてはビジネスするつもりはなかった。ここを訪れる人のほとんどは、最初からツアーのことを知っていて、それに申し込んだ人である。カフェのみが目的の人は少ない。ただ、ここは多目的スペースの機能も兼ね備えており、様々なイベント会場としても使用されている。沖縄県が力を入れているMICE（Meeting, Incentive, Convention/Congress, Event/Exhibition）といわれる国際会議や国際展示会、国際見本市など、ビジネス目的の旅行者誘致のための会場としてここを利用する案もある。

地元の人によると、ここは昔から闘牛や踊りをした「カリー（嘉利）な洞窟」ということだった。「ガンガラーの谷」がオープンしたとき、あるおじいさんは、「歴史は繰り返す」と感想を述べた。ここはこの辺りに住んでいた人の拝所ではないが、地元以外からのカミンチュ（神人；民間巫者）は、以前から「イキガ洞」などを拝みに来ていた。そのようなウガン（御願）を目的とするユタなどのカミンチュ（神人）、および彼女たちに連れられて来た人には、自己申告制で一般のツアー客とは異なる入場料を少しもらっている。頻度はそれほど高くないが、宮古や久米島など、遠くからの人もここに拝みに来ていと聞いた。だから、ここはウガンジュ（御願所）の機能も遺跡としての機能も両方あるところである。今から2年ほど前、まだこのツアーを開始する以前、「イキガ（男）

の洞窟」のことがネットに流れ、それを見た人が、面白おかしく訪れたことがあった。彼らはビデオを撮り、ゴミを散らかし、態度も大変悪かった。ツアーが開始されて以降、そのようなことはほぼ見られなくなった。

ここは人間が古代から関わってきた本物の場所なので、それが強み。何千年前にも飛んで、目に見えない世界も想像してもらおう。南都は辺戸岬の石林山の観光も手掛けている。あそこはバリアフリー・ルートにしているが、ここはそうすると自然を損なうので、あえてしなかった。玉泉洞が、創られたテーマパークの中であってエスカレーターも設置され、整備されているのと対照的。「ガンガラーの谷」には30年以上前に造られた舗装道は敷かれているが、ジオパークとして、この場所の雰囲気을できるだけ壊さないように守っていきたい。南城市は「スピリチュアル」という言葉を観光のキーワードとして使用しているが、私たちは敢えてそう言わないようにしている。それは、ここにいろいろなジャンルのものがみられ、科学的なもの（考古学的な遺跡）もあるので、イメージがひとつの方向に固定化することを避けるためである。旅行者はこのような形を学習型観光などとよぶが、自分としてはジャンルを絞ってはいない。発掘現場を見ることは臨場感があり、ツアー客は大変喜んでいる。実は、見られるほう（発掘者側）も、一般人への関心が喚起できるとして喜んでいる。毎年発掘の時期には、小中学生対象に無料見学会もおこなっている。

以上、「ガンガラーの谷」ツアーといわれる洞窟観光に関して、それが開始された経緯や主催者側の目的、スタッフやツアー客の人数および動向、聖地としての信仰の様子、古代の遺跡としての価値などの諸特徴を、インタビューをもとに記した。そこからは、この洞窟一帯がウガンジュ（御願所）、遺跡、あるいは太古からの自然が保たれてきた場所でもあるという、多面的な性格を持つことがうかがえた。また、ここは沖縄全体の人々の聖地ではあっても、その周辺に住む人々の聖地ではなかったため、一種の体験型学習装置として観光地



化されることに対し、地元側の反発はあまりなかったこともわかった。しかしながら、地元の人々の篤い信仰のある洞窟が観光資源化することには、強い反発を伴う場合もある。次章では、観光化によるコンフリクトが顕著にみられた例を挙げ、その要因を考察する。

## 2 聖地（洞窟）の観光資源化から生じたコンフリクトの諸相

沖縄にある洞窟のいくつかは、神の座す場所として古くから人々の信仰を集めてきた。琉球王朝時代、「琉球八社（官社）の制」により王府から特別の扱いを受けた神社の中にも、識名宮や普天満宮、天久宮、金武観音寺など、洞窟信仰がもとになっているところが多々ある。このような聖地は戦時中、避難壕として一時的に特殊な使用のされ方を余儀なくされたが、長らくは信仰の対象として、健康願いや家内安全、子孫繁栄など、様々な祈願の場所となってきた。しかし、戦後は共同体の崩壊や宗教の世俗化などの要因から、これら聖地の一部はあまり顧みられなくなり、荒廃した。そのため、そこを整備・活性化するにはどうしたらよいか模索されるようになった。たとえば、沖縄本島北部の金武では、信仰対象であった金武観音寺の洞窟を再び整備し活性化するため、ここ20年ほど古酒の貯蔵庫としてその洞窟を活用することが試みられてきた。そこで、本章では古くからの聖地である金武の洞窟の新たな活用の事例をもとに、信仰と観光との共立・共存の難しさをみていきたい。

金武観音寺（高野山真言宗金峯山観音寺）は、沖縄本島北部の金武町字金武に位置し、その境内には長さ270m、地下30mの洞窟（鍾乳洞）があり、琉球王朝時代から琉球八社のひとつとして人々の信仰を集めてきた。『金武町乃指定文化財』によれば、金武観音寺は16世紀に日秀上人により創建された。現存する建物は1942（昭和17）年に再建されたもので、近世社寺の建築手法が取り入れられた貴重な建築物として、1984（昭和59年）6月1日に有形文化財（建

造物)に指定された(1994:1-2)。金武観音寺の洞窟内には十六羅漢像や金・銀の滝、仏天閣や菩薩昇天図、天蓋、こけし観音など、鍾乳石の形を仏教に関連するものにみたてた拝所(案内板)が数カ所あり、日秀上人が蛇退治をした話などから、龍神信仰もみられた。第二次世界大戦中は何千人という人々がこの洞窟に避難したという。

先述した沖縄本島南部の玉泉洞が発見されるまで、ここは修学旅行などの観光コースに入っていた。当時、洞窟の入口は金武区公民館に隣接した区の管理区域側にあり、そこで見学料を払って中に入ったという。現在、金武観音寺の境内には有限会社金武酒造が営む観音茶屋があり、洞窟に入るときはそこで見学料を支払う仕組みとなっている<sup>(10)</sup>。この洞窟は一定温度(17度)を保つことから、泡盛や豆腐ようなど、沖縄の酒や料理の貯蔵庫としても使用されている(写真4)。

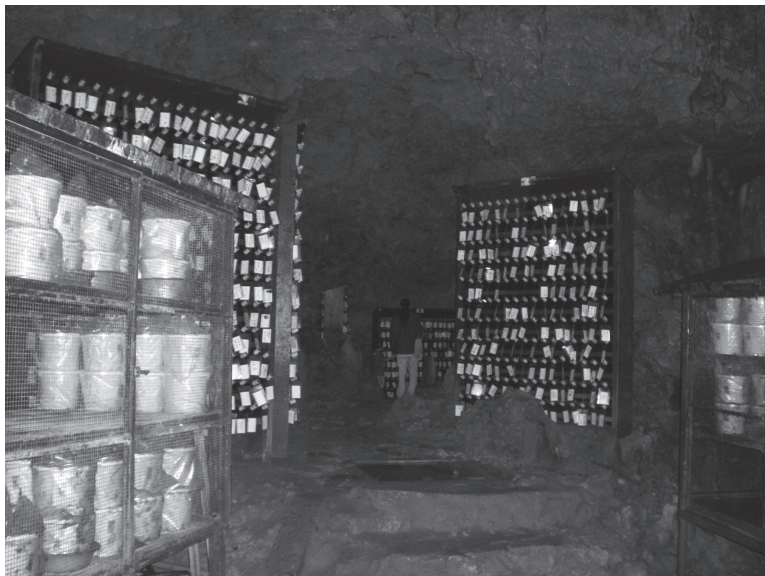


写真4 金武観音寺の洞窟(古酒蔵)

次に、信仰地としての金武の洞窟が泡盛古酒の貯蔵庫として使用されるようになった経緯を、有限会社金武酒造の専務、T・A氏の話からまとめてみる<sup>(11)</sup>。

### (1) 有限会社金武酒造専務、T・A氏の話

金武町は水が豊かな土地で、大きなカー（井戸や泉；「大川」とよばれてきた「長命の泉」や「キンタガー（慶田川）」等）や、28カ所ほどの鍾乳洞がある。金武観音寺付近は高台になっており、グスク（城）跡があった。今は裏手が米軍基地（キャンプハンセン）になっている。山側に基地、その下に住宅街（金武区）、畑（並里区）、海と続いている。金武町はひるぎ（マングローブ）林やターウム（田芋）畑、田圃もある自然豊かなところだが、米軍基地が60%を占める地域でもある。新開地はバー街で、与那国や宮古などからの出稼ぎの人がやっていた。

金武の観音寺は何も高野山が造ったのではなく、金武の人々がお米などを持ち寄り共同で造ったもの。戦後、金武観音寺の洞窟には米兵が来て、バーベキューパーティをしたり、裸の女性の絵を描いたり、中高生が猥褻行為やシンナー遊び目的で入ったりして荒れており、地域の人は誰も手をつけなかった。「寺は危ないから近づくな」と言われていた。前任職は洞窟内にマッシュルームを植えようとしたが、うまくいかなかった。1987（昭和62）年のある日、テレビ番組で山梨の鉄道が廃止されてその跡地がワインセラーとして使用されている話を知り、金武観音寺の洞窟を泡盛の貯蔵庫にする案を思いつき、それを家族に話した。最初、家族、特に母は「ウガンジュ（御願所）に酒を置くなどとんでもない」と言って反対した。そこで、貯蔵庫案の是非を問いに沖縄の民間巫者であるユタのところを回ったりしていたが、歴史学者（当時、浦添市の図書館長）の賛同もあり、次第に家族も洞窟を古酒蔵にする案に賛成するようになった。1988（昭和63）年、辰年の12月にこの洞窟が酒蔵として許可されたため、母とホースで洞窟に水を撒き、きれいに掃除をしてからここに泡盛を貯

蔵した。もともと龍神信仰があったことから、泡盛の銘柄は「龍」とした。また、豆腐を麴や泡盛で発酵させた料理、豆腐ようも貯蔵し始めた。前住職も体を悪くして洞窟の管理が思うようにできなかったのも、この申し出を喜んだ。また、金武観音寺境内にはかつて売店があったが、20年間使用されずに放置されていた。シロアリの被害も心配だったので、前住職と相談してその店を壊し、観音茶屋を造った<sup>12)</sup>。

自分の家では、1949（昭和24）年から酒造を始めた。戦前は首里城中心の官営で酒造がなされていたが、戦後は闇酒も増えたので、政府は土地の有力者に酒造の免許を出した。その時、祖父が免許を取った。でも、祖父は医者だったためその仕事が忙しく、祖母と母が酒造を継いだ。父は役所勤めをしていたが、34歳で亡くなったため、母が養豚や酒の配達などの苦勞をしながら酒造を続けてきた。

神仏の備わっているところには沢山の人が来るほうがよい。泡盛の貯蔵・販売を始めてから、500人ほどだった正月参拝者が2万人以上に増えたりした。金武といえば（米軍兵士による）少女暴行事件も起こり、沖縄の人にも基地の悪いイメージだけがあった。それを払拭したかった。人々の要望で、その半年後には5年、および12年のボトルキープのシステムができた。今はその6割が内地（日本本土）の人の依頼である。私はここは祈りの場なので、その力で酒の味がよくなると信じているし、酒はもともと神に捧げるものだから、洞窟に泡盛を貯蔵することは悪いことではないと思う。鍾乳洞の酒は付加価値の好例であると考えている。

しかし、2007（平成19）年10月以来、これらの貯蔵酒をすべて他へ移すように、観音寺の住職に言われている。母宛に訴状も来た。住職側は、酒の貯蔵庫としての使用は契約書のない口頭での約束であり、1987（昭和62）年から10年間の約束であったので、すべて撤去してほしいとのことだった。観音茶屋も撤去せよと言われている。洞窟に入ってすぐは寺の管理区域だが、洞窟内の下の

広間から半分以降は区の管理区域なので、そこに泡盛を引き続き置かせてもらいたいと思っている<sup>(13)</sup>。しかし、それは寺院側には認めがたいことと言われている。100年、200年もののコース（古酒）を作れば金武町のためにもなると信じているので、できれば大広間の酒のタンクだけはそのまま移さずに置かせてもらうことを望んでいる。

もともと金武観音寺の住職は、祖父（医者・議員）が戦後、管理者が誰もいなくなり火事があつたりしたのを心配し、読谷から依頼して連れてきた。しかし、3代目の住職が受け継いだ今、両家の関係は薄れてきている。

以前、大晦日から正月にかけて、金武観音寺に参拝する人々にターウム（田芋）饅頭やそばを売り出していた。しかし、広島のもみじ饅頭がヒントとなり、大晦日以外にもほしい人にいつでも買ってもらいたいと考え、金武観音寺の門前にレストランを開いた。現在、長男がターウム（田芋）料理などを作り、そのレストランを営業している。だが、寺院側からの訴えもあったため、そこをカフェ（茶屋）にして、レストランはたたもうと考えている。

以上の話から、もともとは信仰対象であった洞窟を、地元の酒造所が聖地復興をはじめ、地域振興や観光、商売等のために活用した経緯が明らかになった。以前は寺院側と酒造側はそれぞれの利益を考え、持ちつ持たれつの関係であった。しかし、最近になって代が替わり、寺院側の考え方も変化し、聖地での商売は退ける方向にシフトしたと考えられる。そこには、酒造という経済行為に対する信仰サイドからの物言いという様相がみられ、相互に妥協点を見いだせない状態に陥っている<sup>(14)</sup>。営業者（酒造会社）と寺院の所有者（住職）が異なるため、信仰と振興の両立が困難になった例ともいえる。次に、この金武観音寺との比較を念頭に、同じく琉球八社のひとつで洞窟信仰がそのもとになっている普天満宮の事例を挙げ、聖地と観光の関係をさらに探っていきたい。

沖縄本島の宜野湾市普天間に位置する普天満宮は、洞窟に琉球古神道神を

祀ったことがその始まりといわれ、15世紀半ばには熊野権現を合祀したため、普天満権現とも称される。当宮が配布している『普天満宮 略記』によれば、首里桃原に女神が出現し、後に普天満の洞窟に籠った伝承や、洞窟より仙人が現れ、「我は熊野権現なり」と顕示した伝承等が伝えられている。琉球王朝時代には、旧の9月に王や三司官（宰相職、実質的な行政の最高責任者）、ノロ（村落最高女性祭司）、一般の人々が各地より参拝したという。現在でも、航海安全、豊漁、五穀豊穡をはじめ、交通安全、縁結び、安産、初宮参り、建築関係諸祈願、商売繁盛、学業成就などの神として信仰されている（写真5）。



写真5 普天満宮の洞窟

普天満宮の洞穴は、長さ280m、洞口が2カ所、大きな広場が3カ所あり、沖縄貝塚時代の遺物も多数発見され、1990（平成2）年8月1日付けで宜野湾市文化財「名勝」に指定された。第二次世界大戦中は1944（昭和19）年の10・10空襲以降、首里や那覇の住民が北部に大移動し、洞窟にはそれら多くの避難民が暮らしていた。今でも洞窟内には当時を偲ばせる遺品が多く散乱している

という。洞内での被災はなかったが、米軍上陸の1945（昭和20）年4月1日に、第1広場に入っていた人のほとんどが南部へ避難し、その翌日には洞窟避難者全員が捕虜となった。

現在、普天満宮の洞窟は、信仰以外には特に何かに活用されているわけではない。宮司によれば、1年に1度、6月30日の大祓い式の日、通常は閉めてある扉を開け、公開している部分の洞窟を通り抜ける行事をおこなっている。これは、聖地を通り抜けることによる「再生」を意味するという。また、宮司は宜野座村の松田にある洞窟の活用を考える委員会に所属している。この検討委員会では、自然をそのまま残すだけでなく、その利用も考えているという。最初は畑を作ることにより赤土が洞窟に入ってくるので、その対策をメインに考えたが、そのうち町興しに繋がられないかということになった。今ではマッシュルームの菌の貯蔵場所、あるいはワインや泡盛のクーラーにすることなどを検討している。しかし、宮司は信仰と営業は別問題と考えており、普天満宮の洞窟を酒蔵等に活用することはないように見受けられる。

このような普天満宮の事例からは、前述した金武観音寺の事例とは対照的に、信仰対象ではない洞窟に対しては観光化や経済活性化を進めるものの、伝統的聖地とされる洞窟にはそれらを当てはめない姿勢がみてとれる。従って、信仰用と観光用の洞窟を明確に区別することが、コンフリクトの発生を回避させることに繋がると考えられる。続いて、それでも聖地の観光化が回避できない事例として、近年になり UNESCO の世界遺産に登録されたセーファーウタキ（斎場御嶽）を取り上げ、その現状および問題点を紹介する。

### 3 世界遺産・セーファーウタキ（斎場御嶽）の観光化による問題点

これまでみてきたように、急激な観光化が進む沖縄において、以前から地元の人々により信仰を集めてきた聖地もその影響を受けつつある。その最たるも

のが、2000（平成12）年、世界遺産に「琉球王朝のグスクおよび関連遺産群」のひとつとして登録されたセーファーウタキ（斎場御嶽）である。鍾乳洞が隆起してできたこのウタキは、沖縄本島南城市の東側、久手堅集落に位置し、かつては琉球王朝を庇護する神女のいる島、久高島を琉球国王が遙拝するための聖地であった。現在も、ここは地元の人々により霊威の高い聖地として崇められている。しかし、世界遺産登録後は入口に施設がつくられ、参拝するためには入館料が取られる仕組みに変わった（写真6）。これを、国や行政、あるいは観光客などによる地元文化の収奪と捉えることもできる。ここでは、ガイドの方々の話をもとに、世界遺産登録後のセーファーウタキ（斎場御嶽）の現況をみていきたい<sup>(15)</sup>。



写真6 セーファーウタキの入口

### (1) セーファーウタキのガイド、T・M氏の話

セーファーウタキ（斎場御嶽）と知念グスク（城）には、うち（「文化財案内講師友の会」というボランティア団体）のメンバーがガイドとして待機して



いる。メンバーは約11名で、ローテーションを組んでいる。ほとんどが定年になった人で、そのうち女性は2名、主婦もいる。毎日2～3名はガイドとして出る。多いときは、午前中に4回案内する場合もある。1回50分前後かかるので、1日3回くらいが適当と思う。

地域資源として、セーファーウタキ（斎場御嶽）をみている。先日、このガイドの人たちが揃って「ガンガラーの谷」へ行ったのは、文化資源の活用という点が共通するので、勉強のためだった。これからは、（地域・文化資源は）点でなく面で考えることが必要。

私は地元出身だが、転校生でいろいろと移り住んだ。でも、年をとって故郷に戻り、目の前に素晴らしい歴史があるのに知らないのは癪と思い、勉強をした。琉球史をコンベンションセンターで1カ月ほど勉強し、講習会も受けてガイドとなった。

県外の人にはウタキ信仰がわからない。ここを葬儀場に間違える人もいる。だから、社も御神体もないウタキ信仰のことを説明する。しかし、よくわかってもらえない場合も多い。「何もなかったよ」と言って帰る人もいる。石畳だけを歩けばよいのに、何かあると思って道なきところにも入っていくため、人による獣道ができてしまう。これは聖地を荒らされることになり、文化の大きな壁である。私は小さいときから「ウタキにはみだりに入らないもの」と教えられてきた。だから、このような聖地の自然は守られてきた。今は、ここにある鍾乳石を本物か確かめるため、石で叩く人もいる。知らないで香炉に腰掛ける人もいる。お客さんが通る道を柵で区切るという話もあるが、それはちょっと……。

ここに拝みに来る地元の人には静かに祈りたいのに、観光客が大声を出したりするのでやりにくいと言っている。ゆくゆくは入場者数の制限がなされるようになるかもしれない。ユタ（民間巫者）の人たちは、お祈りのために来る。それをみて、お客さんに「この方々はノロ（琉球王朝時代に国から任命された村落最高女性祭司）ですか」と聞かれる。本人の前では「違う」とも言えず、離

れたところで「あの人はノロではない」と説明する。セーファーウタキ（斎場御嶽）内の「お休み処」といわれる場所にもユタは祈りに来る。お客さんに「ここも聖地か」と尋ねられるが、その場所を入れてしまうと従来言われている聖地の数が6カ所ではなく7カ所になってしまうので、やはりその場を離れてから「そこは聖地ではない」と説明する。ユタの人たちには、ヒジュールウコー（火をつけない冷たい線香）は守ってもらっている。ウチカビ（あの世の紙銭）にも火をつけてはいけない。供物も持ち帰ってもらっている。生ものが腐って置いてあるのは観光客に印象が悪いので、もし残っていれば6時以降に自分たちが「ウサギさせてください（下げさせてください）」とって下げる。

以前、ここは日の出を見るため、正月と冬至には拝みの人で一杯になった。今、元旦は閉まっているので入れない。元旦を過ぎると中に入れるようになり、県外からのお客さんも多く来る。問題はスペースで、久高島が見える場所（サンダーイ；三庫理）は10名ほどで満杯になる。「入ったら交代して」と言うが、いったんグイス（祈りの言葉）を唱え始めると長く、文句も言えなくなる。彼女（ユタの人）たちは「はい」と言いながら、なかなか動かない。今は岬公園でも日の出を拝めることが広まり、向うに行くユタの人も増えている。

ここはバリアフリーではないから、車椅子で入れないことも課題。そういう人に対しては、入口にある館だけを見てもらい、説明している。また、御門口の階段には手すりが付いているが、これは片側のみ。もう片側になぜ付けないかと言われる。もっともだが、景観や予算のことなどもあり、なかなか大変。

ここには女性の方に来てほしい。オナリ神になるので。これはウナイ（オナリ）神信仰ともいうが、沖縄の人でも若い人はこの言葉を知らない。

## （2） セーファーウタキのガイド、Y・K氏の話

うちの叔母は知念字の、戦後最後のノロ（村落最高女性祭司）だった。彼女は結婚もせず、子供もいなかった。NHKの番組「琉球の風」の撮影のため、セー

ファーウタキ（斎場御嶽）のウフグーイ（大庫理）を使用した際、撮影前にその叔母さんが祈りを捧げた。

南部の歴史だけではなく、中部や北部を含めた沖縄全体のことを押さえておかないと、お客さんには説明できない。だから、今帰仁や勝連にも「文化財案内講師友の会」のメンバーで行く。また、修学旅行生は歴史ばかりだと飽きるもので、昆虫などをはじめ動植物についても説明する。「ガンガラーの谷」のガイドは本土の人もあるが、ここは地元の人が案内をしていることに価値がある。

小さい頃、「ここには男が入ってはいけない」と言われた。世界遺産に認定されるまでは、みな線香に火をつけて拜んでいた。火をつけないと願い事は通らないとされた。だが、今はヒジュルウコー（火をつけない冷たい線香）となり、半紙の上にそれを置き、拜みが終わればその半紙に包んで持ち帰ることになった。以前はウチカビ（あの世の紙銭）も燃やしていたので、バケツに水を張ったものを用意し、5時になると火を消して回った。また、今は拜む人には電話番号と名前を書いてもらうようになった。最初は「拜みに行くのになぜ金を取るのか」と苦情を言われ、名前等を書くことを拒否されたが、200円の入館料が半額になることもあってそのうち書くようになり、苦情も減った。以前はビニール袋に供物を包んで木の奥に投げ入れる人がいた。第3金曜日は清掃の日で、よくそのようなゴミを見つけたが、最近は少なくなった。10月のアガイウマーイ（東御廻り；沖縄本島南部の東海岸にある聖地を回る伝統的巡拝習俗）の日には、門中拜みでここを訪れる人もいる。そのような人の中には、入館料を払わない人もいる。入館料をいただくようになってから、（参拝者の）抵抗はあった。たとえば、王家の墓であるタマウドゥン（玉陵）は、今は中に入らなくとも入口付近にウコール（御香炉）を造ってウトゥーシ（お通し；願いを中継する場所）にした。だから、そこは中に入るために入館料を払う必要がなくなった。ここでも時間にも縛られず、中に入らなくても済むウトゥーシ（お通し）を駐車場のところに造ろうという話が出た。しかし、文化財課がなかなかウン

と言わず、世界遺産にもなったので難しい。香炉も踏まれて壊れてしまい、接着剤で付けてありカッコ悪いのに、なかなか直せない。入口の石畳は雨のときは滑る。横に道を造ればよいが、この石畳も世界文化遺産なので、それもなかなかできない。入館料を取ることは以前、文化財課に反対されたが、今は観光・文化振興課が関係するようになったため、実施された。このウタキには、観光・文化振興課（南城市観光・文化振興課）、学習課（南城市教育委員会生涯学習課）、文化財課（南城市教育委員会文化財課）の3つが関わっている。

以上の話から、世界遺産登録後のセーファーウタキ（斎場御嶽）の観光化による問題点が、いくつか浮かび上がってくる。それらをまとめると、以下のようになる。

- ①観光客数増加による文化遺産保護（人数制限などを設けるのか）
- ②観光客の伝統文化（ウタキ文化）への無理解による文化・自然の破壊、および拝む人への影響（柵などを設けるのか）
- ③観光客に対する、沖縄の信仰に関する説明の困難さ（ユタなど民間巫者と村落最高女性祭司であったノロとの相違に関する説明の必要性）
- ④伝統的な信仰と入館料支払いの義務（ウトゥーシなどを設けるのか）
- ⑤従来信仰に対する変化の要請（線香や紙銭に火をつけない、供物を片付けるなど）
- ⑥世界遺産に登録されたことによるバリアフリー化等の困難さ
- ⑦3課（観光・文化振興課、生涯学習課、文化財課）の考え方の相違

①に関しては、南城市役所 総務企画部 観光・文化振興課 副参事のK・H氏によれば、セーファーウタキ（斎場御嶽）には年間22万人の観光客が訪れており、文化遺産の見学としては人数が多すぎるということであった。昔ながら

に女性だけを入場許可するなどして人数制限を課すのか、あるいは見学時期を制限するのかなど、持続可能な観光づくりをするにはどうしたらよいか、検討していかなければならないという。

②に関しては、沖縄県教育委員会による「精神性への配慮」等の提言がなされているが、これは③のユタの拝みへの配慮と観光客への説明の必要性が生じていることにも関連する事柄である。セーファーウタキ（斎場御嶽）における遺産化と信仰の価値について研究した門田岳久によれば、「セーファーウタキ（斎場御嶽）の『信仰』概念を現場状況から解すると、次の2つの意味に分解できる」とし、そのひとつをアガイウマーイ（東御廻り）などの「『正統的』な信仰」、もうひとつを宗教者の関わる個人的で民間の拝みのような「『周辺の』な信仰」とした。そして、前者が「遺産化過程で価値化された信仰」であり、後者は「価値を阻害する要素として周辺化され、文化的景観の維持に対するリスク因子とみなされた」と論じた（門田2008:247）。「正統的」な琉球王朝の歴史とそれに付随するノロや聞得大君などの「正統的」な宗教的職能者に関する説明が、「周辺の」で「非正統的」、「リスク因子」とまでみなされるユタなど民間巫者により「脅かされる」とすれば、世界遺産が提供する価値観を相対化し、ユタまでも組み入れた沖縄の信仰を包括する新たな価値観に基づく説明を編み出す必要があるといえる。

④や⑤に関しては、従来の信仰形態の一部が世界遺産の認定により変更を余儀なくされたという点だが、これはユタや拝みに来る人々の妥協、柔軟性により一応解決したかにみえる。しかし、仕方がないとしながらも困惑している姿もみられる<sup>(16)</sup>。

⑥に関しては、⑦に記した3つの管理先の考え方の相違がその主要因となっていると考えられる。インタビューによれば、文化財課はなるべく現状を変えずに遺跡を保存することを至上命題とする。それに対し、観光・文化振興課は観光客の利便性や安全性、集客と経済・文化の活性化を目指すという違いがあ

る。生涯学習課はボランティア・ガイドの方々が所属する部署だが、文化財課と観光・文化振興課の間で板挟みといった観もある。今後は三者の利害調整を図り、何を優先するのかを考えていかなければならないだろう。

#### 4 信仰と観光の共存を目指す民俗知

セーファーウタキ（斎場御嶽）の現状に関するインタビューにはまた、上記の問題点を克服し、信仰と観光とが共存可能となるヒントが隠されているといえる。それは、観光化に対する地元の人々の伝統観念を用いた置換や再解釈等の知恵、すなわち民俗知とよべるものである。それらは、具体的には以下のよ  
うな観念である。

- ①「オナリ神信仰」といわれる女性の宗教的優越性
- ②「ウトゥーシ（お通し）」とよばれる宗教的中継の観念
- ③「アガイウマーイ（東御廻り）」をはじめとする聖地巡拝の慣習

①に関しては、沖縄では従来聖地に入れるのは女性であった。ガイドの方なども言っているように、これをセーファーウタキ（斎場御嶽）をはじめとする聖地見学に活かせば、入場者数のオーバーを防げるかもしれない。また、神聖で厳格な雰囲気も取り戻せ、沖縄の伝統的宗教に対する理解が深まる可能性がある。これは、いわゆる伝統文化の再解釈、あるいは再利用といえよう。

②に関しては、聖地の入口近くに「ウトゥーシ（お通し）」用の香炉や碑などを建てれば、中に入るための入館料（拝観料・入場料）を支払わなくて済む。その聖地にとっては新しい文化となろうが、その考え方は十分に沖縄の伝統にのっとったものであり、拝みの静寂さやスペースの狭さ等も解決されるかもしれない。これは、聖地内の拝所を入口近くに移すという一種の置換、あるいは

伝統観念の援用といえるかもしれない。

③に関しては、南城市が「東御廻り国際ジョイアスロン大会 in 南城市」などで既に実行していることである<sup>(17)</sup>。沖縄にみられる聖地巡拝の慣習を観光客の動きにも当てはめ、様々な聖地を巡り歩き、沖縄の精神性や歴史、自然環境などに触れる機会を設ける。これもやはり、伝統文化の活用、再解釈、あるいは置換とも捉えられる。そのような巡拝コースをより広い地域で計画できれば、信仰と観光との共存に多少なりとも貢献することになるだろう。

以上のような案はまだ十分とは言い難いが、いわゆる伝統知・民俗知を活用することは、従来の観光の収奪性を抑制・変化させることに繋がるのではないだろうか。沖縄における聖地の観光化は、内部（ホスト）と外部（ゲスト）双方にとって互恵的となる新たな文化をそこに築く可能性を秘めているとも考えられる。なぜなら、洞窟のような聖地が、地元の人だけでなく外部者にも開かれることで、さらに多くの人々に豊かな体験を提供することができるようになるかもしれないからである。

## おわりに

本稿では、信仰と観光とのはざままで揺れる聖地のひとつとして、沖縄における洞窟（ガマ）を取り上げ、その新たな活用の試みと、その結果生じたコンフリクトや問題点をみてきた<sup>(18)</sup>。それらの聖地と観光との共存関係をわかりやすく図示すると、表1のようになる。まず、沖縄本島南部における「ガンガラーの谷」の事例では、考古学や民間信仰、自然環境などの複合的体験学習を目的とした洞窟ツアーが開催されている様子を紹介し、洞窟の観光資源化の様相について明らかにした。ツアーの見学地には、「種之子御嶽（サニヌシーウタキ）」あるいは「イキガ洞」、「イナグ洞」といわれる聖地がある。だが、そこは沖縄全体の人々の信仰を集めてきたものの、その集落の人々の伝統的な聖地、いわ

沖縄の洞窟信仰と観光

表1 聖地と観光の共存関係

洞窟（ガマ）	ガンガラーの谷	金武観音寺	普天満宮	セーファーウタキ
管理者 （経営者）	（株）南都	金武観音寺 ただし、泡盛は （有）金武酒造	普天満宮	南城市観光・文化 振興課
信仰者	集落 × 沖縄県全体 ○ 沖縄県外 △	集落 ○ 沖縄県全体 ○ 沖縄県外 △	集落 ○ 沖縄県全体 ○ 沖縄県外 △	集落 ○ 沖縄県全体 ○ 沖縄県外 △
地域密着度	低い	高い	高い	高い？（地域とい うより琉球王朝）
見学科・ 拝観料	ツアー料金 大人1名2,000円 他	拝観料無料 洞窟見学科 大人1名400円他	拝観料無料（洞窟 見学も含む）	入館料 大人1名200円他
特徴	観光ツアー （体験学習型） ツアーガイド	古酒を貯蔵・販売 （絵馬に似た、祈 りのようなメッ セージがボトルに 掛かっている）	古酒などは一切置 いていない	世界遺産 ボランティア・ガ イド
共存関係	良好	良好でない（現在）	無し	問題点多い

備考：○…いる ×…いない △…あまりいない

ゆる地元密着型の聖地では必ずしもなかった。そのため、目立ったコンフリクトもなく、聖地と観光が共存しているように見える。ただし、心無い観光客が面白半分「イキガ洞」に出入りしたこともあり、そういう事態が頻繁になれば、観光客と地元の人々の間にコンフリクトが生じる可能性もある。

次に、沖縄本島北部にみられる洞窟信仰と洞窟活用との軋轢を、金武観音寺と金武酒造の関係から論じた。その結果、古くから信仰対象となっている洞窟に対し、今でもその信仰が深く根付いている地域では、地域振興や観光、産業などいわゆる世俗的側面との融合・共存を避ける傾向があることがうかがえた。「ウガンジュ（御願所）に何かするなど、とんでもない」というような意識は、



沖縄の多くの人々に共有されてきたと考えられる。しかし、ここで取り上げた事例は、ただ単に商売のためだけではなく、洞窟の清掃や地域振興に役立てようとの意図もあったため、地域の人々にもそのすべてではないにせよ、受け入れられてきた側面もある。この聖地の最たる信仰者や管理者が地元の人々ということが、「ガンガラーの谷」の事例と決定的に異なる点である。「ガンガラーの谷」の管理は沖縄の人によりなされているとはいえ、それは一企業であり、信仰者も地元の集落を超えた沖縄全体だった。その違いが、同じように信仰されてきた洞窟でも、外部に開いたり産業振興に活用できたりするのか否かの分かれ目になったといえる。また、ここでのコンフリクトは、観光客（ゲスト）対地元（ホスト）という単純な二項対立ではなく、地元の人同士のコンフリクトだった。洞窟信仰を重んじつつも、地域振興にそれを活かす立場と、洞窟信仰そのものを何よりも重んじ、世俗の事柄を一切排除する立場というホスト同士の対立であり、その解決はより困難を極めると考えられる。

続いて、沖縄本島南部にあるセーファーウタキ（斎場御嶽）を取り上げ、UNESCOの世界遺産登録後の観光化により生じた新たな問題点を分析した。だが、そこには問題点だけではなく、それらを克服し、聖地と観光が共存できる可能性も見出した。それは、観光化に対する地元の人々の伝統観念を用いた置換や再解釈、援用等の知恵、すなわち民俗知とよべるものであった。それら民俗知を活用することは、従来の観光の収奪性を抑制・変化させることに繋がると考えられる。精神的な充足の場としての聖地が、地元のみならず外部にも開かれることで、より多くの人が豊かな体験を共有できるようになる。そうすれば、そこには一方的な収奪とは異なる、新たな文化が生まれる可能性がある。

今後、沖縄の洞窟は、思いもよらないユニークな活用法により、脚光を浴びるようになるかもしれない。また、歴史的には信仰対象ではなかった洞窟が、新たな聖地として信仰されるようになる場合も考えられる。実際、筆者は以前、沖縄市の八重島にある「大国みろく大社」において、その境内内の洞窟の暗や

みのなか、瞑想体験をしたことがある<sup>(19)</sup>。当大社の宮司は、洞窟内に鎮座する龍や観音など様々な神や、それにもとづく世界観を教えてくれた。その社には、いわゆるスピリチュアリティの探求のために沖縄内外の若者たちが集まり、洞窟における瞑想等をおこなっていた。これは、瞑想体験の場としての洞窟の活用であり、ある人々にとっては新たな聖地の創造（誕生）ともいえる。

いずれにせよ、太古からの歴史を感じさせる沖縄の洞窟群は、その活用法に何らかの付加や変化がみられるとしても、これからもなお霊験あらたかな聖地として、人々に篤く信仰され続けることに変わりはないであろう。そこを外部者に開くことは果たしてよいことかはわからない。だが、セーファーウタキ（斎場御嶽）の事例でみてきたように、その流れが止められないならば、以前から地元には伝わってきた民俗知を手掛かりにしながら、一方的な外部者による搾取ではない、外部者と内部者双方にとり互惠的となる文化を構築していく必要性があるのではないだろうか。

## 注

- (1) たとえば、神仏習合信仰の復活を目指す神仏霊場会が江戸時代のお伊勢参りを模し、関西で社寺150カ所を巡る新巡拝路「神仏霊場巡拝の道」を提案し、神職と住職が揃って神道と仏教の聖地を巡るというパフォーマンスが繰り広げられた。この巡拝創出の目的には、神仏習合であった日本人の信仰心を復活させ、心の安定や社会平和に貢献するほか、神道や仏教など既成宗教教団離れを食い止め、社寺参拝の人数を増やし、地域振興を促すこともあったと考えられる（京都新聞電子版「神と仏祈る、新巡拝路神仏霊場会が設定」2008年8月29日、京都新聞電子版「天台座主 初の伊勢参り 新巡拝路開始を報告」2008年9月8日、asahi.com〈朝日新聞社〉「寺社と寺院、巡拝の道」26社寺が加わり150に」2008年9月29日参照）。
- (2) マテララの洞窟住居はイタリアのバジリカータ州にある。石灰岩の洞窟住居はサッシ（岩山）とよばれ、長らく小作農の住居、あるいは教会や貯蔵庫、墓として利用され、不衛生で不便な南イタリアの貧しさの象徴とされた。この洞窟群に人が住んだ形跡は古く、旧石器時代の出土品も発見されている。現在、洞窟は最新のマシンを装備したスポーツジムやホテル、レストラン、オフィスなどに活用されている（「洞窟住

## 沖縄の洞窟信仰と観光

居の町 マテラを歩く」地球の歩き方ガイドブック他参照)。また、フランスのロワール地方などでは、家を造るために切り出した石切り場あとの洞窟をキノコ栽培場やワインカーブとして活用している(フジテレビ「洞窟の恵み」あつあつボンジュール 第71回 2003年11月23日他参照)。

- (3) 洞窟は洞穴ともいい、一般的には人間が入れる大きさをもった地下空間のことで、洞窟入口の一番幅広い場所が奥行きあるいは深さよりも小さいものと定義され、自然にできたものと人工的に作られたものとに分けられる。自然洞には石灰洞(鍾乳洞)、海食洞、風穴、フィッシャー、溶岩洞、氷穴などがある。考古学などでは厳密にはこれら自然洞のみを洞窟とよぶ場合が多いが、民俗学や文化人類学などでは防空壕や避難壕、陣地壕、炭坑、トンネル、墓、貯蔵庫などの人工洞も洞窟の範疇に入れて調査をおこなっている。沖縄本島をはじめ多くの地域ではこのような洞窟をガマ、またはアブ、ガー、宮古諸島ではコーザ、ツブ、ツク、八重山諸島ではイーザー、ダヤ、インなどとよんでいる(新垣2005:4-7参照)。
- (4) 玉泉洞にも、泡盛を貯蔵する古酒蔵が設置され、観光の呼び物のひとつとなっている。
- (5) ツアーは予約制で、料金は一般が2,000円、学生は1,500円、10名以上の団体は1名につき1,500円、保護者同伴の小学生以下は無料。時間外ツアー料金は1~5名は15,000円、6名以上は1名につき2,000円追加。ツアーの出発時間は10:00、12:00、14:00、16:00の1日4回。営業時間は9:00~18:00。最新のパンフレットには、「語りはじめた、森の賢者一時の守人が宿る、太古の森。生命の聖地が潜む、ガンガラーの谷。」という文がガジュマルの巨木の写真とともに載っている(「ガンガラーの谷」パンフレット参照)。
- (6) たとえば、1955(昭和30)年ごろ、「沖縄ミロク会」という民間巫者たちの会により、「ガンガラーの谷」にある「母の洞窟」と「父の洞窟」(それぞれ「イナグ洞」と「イキガ洞」と思われる洞窟)で、洞窟(ガマ)の中に押し込められていた神々を解放する儀礼(「岩戸開き」とよばれ、戦死者供養や精神障害者の治療を目的としたもの)がおこなわれたりしたという(野本1972:226-238、北村2009:260-265参照)。
- (7) インタビュー実施日は、2009(平成21)年9月8日。「ガンガラーの谷」には、戦争中、多くの避難民や敗残兵がいたが、川の増水で被災したという(『那覇市史 資料篇第二巻中の六』1974:84-86、北村2009:263-264他参照)。しかし、このような死の記憶は、インタビュー、およびツアー中の解説でも一切語られなかった。これは、観光イメージが損なわれると考えたからなのか、その理由の考察は今後の課題である。
- (8) 「ガンガラーの谷」担当課長のT・K氏によれば、那覇市出身の株式会社南都の社長(昭和11年生)は、若い遺骨収集をし、南部地域に係わっていた。社長は、沖縄

## 沖縄の洞窟信仰と観光

南部には戦跡しかないと思われがちだが、そのような暗い過去だけでなく、普通に暮らしている人々もいる。その人たちの雇用促進も兼ね、南部のイメージを変えるためにも、玉泉洞と「ガンガラーの谷」を公開しようとしたという。従って、戦跡という南部イメージの一元化への反発・疑問がその根底にあったと考えられる。

- (9) 話者のT・K氏（日本本土出身、琉球大学地理学卒業）は、「おきなわワールド」の総務部から「ガンガラーの谷」の担当に異動した。彼は、ワンダーフォーゲル部出身で、登山やシーカヤックもやっていた。同じくこの計画をまかされた同僚（玉泉洞の担当者）は、ケービングクラブ出身者だった。
- (10) 洞窟の見学料、大人400円、中学生300円、小学生200円を観音茶屋で支払うシステム。
- (11) 2007（平成19）年12月1日、および2008（平成20）年9月5日のインタビューによる。
- (12) 観音茶屋を建設した件に関しては、住職側は寺の要求で建てたのではないとしている。今回、事実確認の意味で金武町役場や教育委員会にはインタビューを実施したものの、金武観音寺側のインタビューはまだおこなっておらず、「通知書」等から主張の趣旨を判断した。寺院側に直接インタビューすることは、今後の重要な課題である。
- (13) 金武町役場によれば、地上の所有・区分の資料は金武町役場にあっても、地下の区分までは不確かであるが、金武観音寺の洞窟の半分を区が所有しているということは事実であり、今後は入口を区側に変更する話もあるという。金武観音寺、および普天満宮に対する調査報告は、拙稿2008：1-12 参照。
- (14) これまで、沖縄の聖地がリゾート開発等で失われていくという報告はあった（たとえば、安里1991）。そこにみられるのは、ゴルフ場建設などを進める搾取する外部（日本本土の企業）と搾取される内部（沖縄）という図式だった。だが、ここで取り上げた事例は、同じ地域民同士、いわば内部内での対立関係であり、現状はより複雑度を増しているといえる。
- (15) インタビュー実施日は、T・A氏に対しては2009（平成21）年9月8日、Y・K氏に対しては、同年9月9日。
- (16) セーファーウタキ（斎場御嶽）が世界遺産に登録されて以降、聖地の整備のみならず、入口に「緑の館・セーファ」という建物が造られ、2007（平成19）年7月以降入館料をとるなど、そのあり方が変化してきている（琉球新報「斎場御嶽が“有料”7月から1人200円」2007年5月8日参照）。そのような状況について、そこを訪れた参拝者たちにインタビューを試みたことがある。その反応はたとえば、「お金を取って整備するのは好きではない」（2007年12月3日、那覇市からの参拝者）、「セーファーウタキの入場料は200円だが、ウガン（御願）の目的であれば100円となる。ここの維持・整備もあるし、お金を取るのは仕方がない」（2007年12月3日、竹富島からの参拝者）などの声があり、仕方がないと言いつつも困惑している様子がかがえる。

## 沖縄の洞窟信仰と観光

- (17) 詳しくは、拙稿 2006：27-39参照。
- (18) 沖縄では、洞窟以外にもたとえば墓の観光資源化が行政により試みられたりしている。沖縄本島の中南部には、門中墓や亀甲墓とよばれる父系親族が入る大きな墓がみられる。これらは沖縄の文化表象のひとつとされ、本土との違いもあり観光客の目を引くものとなっている。しかし、墓は穢れや崇りの観念も付随する、普段は簡単には近寄れない異界、あるいは聖地である。それにもかかわらず、沖縄文化理解の一環として、墓内に入る体験をしてもらおうという斬新な試みが、糸満市経済観光部によりなされている。我々が体験できるのは、糸満観光農園内の一角にある家族墓内に入ることである。これは、ヒンプン（入口に設けられた屏風のような扉）もなく、細長い庭があるだけの珍しい形の墓という。また、持主はわかっておらず、厨子甕もなかったとのことである。ハブに噛まれないよう、前日から煙で燻す必要があるため、予約が必要とされる。観光客は墓の内部から外界を眺める体験、すなわち「あの世」から「この世」を望むことができる。
- (19) 2005（平成17）年12月26日の調査による。

### 参考文献

- 安里英子 1991『揺れる聖域—リゾート開発と島のくらし』沖縄タイムス社
- 新垣義夫 2005「洞窟と人間との関わり」『宜野湾洞窟めぐり』No. 5 後援会資料集 平成17（2005.11.5） 宜野湾市博物館 pp.4-7
- 門田岳久 2008「「信仰」の価値—聖地の遺産化と審美の基準をめぐる力学—」『文化人類学』第73巻第2号 pp.241-252
- 北村 毅 2009『死者たちの戦後誌—沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』御茶の水書房
- 金武町教育委員会編 1994『金武町乃指定文化財』金武町教育委員会
- 塩月亮子 2006「沖縄のスピリチュアリティ—シャーマニズム・インターネット・ローカリティをめぐる—」『アジア遊学』第84号 勉誠出版 pp.27-39
- 塩月亮子 2008「信仰と振興のはざま—沖縄における洞窟の新たな活用をめぐる—」『日本橋学館大学 人間社会専攻記念論集』pp.1-12
- 那覇市企画部市史編集室編 1974『那覇市史 資料篇第二巻中の六』那覇市役所
- 株南都 「ガンガラーの谷」パンフレット
- 野本三吉 1972『いのちの群れ』べりかん社
- 普天満宮 『普天満宮 略記』

## 沖縄の洞窟信仰と観光

### 参考サイト

- Asahi.com 〈朝日新聞社〉 2008.8.29 「「神社と寺院, 巡拝の道」26寺社が加わり150に」  
<http://www.asahi.com/kansai/entertainment/news/OSK200808290032.html> (アクセス日: 2008年9月10日)
- 京都新聞 2008.8.29 「神と仏祈る, 新巡拝路 神仏霊場会が設定」  
[http://www.kyoto-np.co.jp/article.php?mid=P2008082900195&genre=J\\_1&area=KOO](http://www.kyoto-np.co.jp/article.php?mid=P2008082900195&genre=J_1&area=KOO) (アクセス日: 2008年9月10日)
- 京都新聞 2008.9.8 「天台座主 初の伊勢参り 新巡礼路開始を報告」  
[http://www.kyoto-np.jp/article.php?mid=P2008090800101genre=J\\_1&areaKOO](http://www.kyoto-np.jp/article.php?mid=P2008090800101genre=J_1&areaKOO) (アクセス日: 2008年9月10日)
- (株)地球の歩き方 T&E, (株)ダイヤモンド・ビッグ社 「洞窟住居の町 マテラを歩く」地球の歩き方ガイドブック  
[http://www.arukikata.co.jp/webmag/2008/rept/rept32\\_01\\_080500.html](http://www.arukikata.co.jp/webmag/2008/rept/rept32_01_080500.html)  
(アクセス日: 2009年10月18日)
- フジテレビ 「洞窟の恵み」あつあつボンジュール バックナンバー 第71回 2003年11月23日  
[http://www.fujitv.co.jp/b\\_hp/bonjour/backnumber/031123.html](http://www.fujitv.co.jp/b_hp/bonjour/backnumber/031123.html). (アクセス日: 2009年10月18日)
- 琉球新報 2007. 5. 8 「斎場御嶽が“有料” 7月から1人200円」  
<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-23563-storytopic-1.html> (アクセス日: 2009年11月3日)

### 付記

本稿は、沖縄文学研究会(代表: 明治学院大学 松島浄教授), および平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)(課題名: 「戦後沖縄文学」の社会学: 文化表象論と文学制度論からの接近, 代表: 法政大学 鈴木智之教授), 平成21年度日本橋学館大学個人課題研究費(課題名: 沖縄における宗教と観光をめぐる文化人類学的研究)の助成により作成されたことを、感謝を込めて記す。